



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

ホモ・エコノミカスとホモ・レシプロカンス

著者	利光 強
雑誌名	エコノフォーラム21 : 学生と教職員のインターコミュニケーション誌
号	25
ページ	47-47
発行年	2019-03-14
URL	http://hdl.handle.net/10236/00027847

2018年
11月12日
月曜日

利光 強 教授（国際経済学）

ホモ・エコノミカスとホモ・レシプロカンス

最初に、実験経済学や行動経済学で示された二つの事例をお話しします。一つ目は、ある託児所では子供の迎えに遅刻する保護者達に少額の罰金を課したところ、結果的に遅刻する保護者達が増えてしまいました。もう一つは、ビニール製のレジ袋に少額の課税をしたところ、大幅にビニール製のレジ袋の利用者が減少しました。ともに、対象者にとっては罰金や課税という金銭的な負担増になるにもかかわらず、一つ目の事例で期待とは反対の結果をもたらすことになったのはなぜでしょうか。いわゆる、新古典派（主流派）経済学におけるホモ・エコノミカス（合理的な経済人）であれば、遅刻者が減少するはずですが、しかし、ここでは遅刻者にとって、罰金が託児所への超過料金として理解されてしまったのではないのでしょうか。つまり、金銭的なインセンティブがモラルや認識を変えてしまったのです。アダム・スミスを持ち出すまでも

なく、市場メカニズムが有効に働けば、強欲（利己的行動）が公益をもたらすことがあります。したがって、人々の認識や嗜好がホモ・エコノミカスのように社会のルールやモラルとは独立に内在しているならば、経済的な仕組みとしてインセンティブを取り入れると、有効な選択を行い、社会全体が効率的になるはずです。しかしながら、先ほどの事例では、罰金と言うインセンティブが人々の認識や嗜好に影響を与えてしまったこととなります。専門的に言えば、選好や嗜好は状況依存的であり、内生的と言えます。したがって、社会的な状況から影響を受けることとなります。さらに言えば、インセンティブとモラル（あるいは、社会的選好）は分離可能ではなく、相互に作用しあい、相乗効果を持つのではないのでしょうか。

さて、もう一方の事例では、期待通り、課税によってビニール製のレジ袋が減少しました。これは環境に

対する配慮がしっかりと人々の認識や選好を形成していたと言えるかもしれません。そのことは環境問題に関する公共の宣伝や教育、等の効果もあるかも知れません。さらに言えば、そうした公共心が培われた社会においては、人々の行為が利己的な利益に影響をもたらす金銭的なインセンティブや市場メカニズムだけでなく、一定の互恵性や条件付きの協調性にも影響を与えていると考えることは不自然ではないと思います。それを「ホモ・レシプロカンス」と名付けるとすれば、主流派経済学ではこうした人間のあり方を捨象し、方法的ではあれ、ホモ・エコノミカスを基礎に理論体系を構築してきたことは、自己都合的なものでしかなく、理論的な作業における怠慢と言えるでしょう。

これから我々は、ホモ・エコノミカスを前提とした「狭義の経済学」ではなく、さまざまな社会科学の考え方を取り込んだ「幅の広い経済学」、すなわちインセンティブと社会的選好をともに包含するような「広義の人間（ホモ・レシプロカンス）を出発点とした経済学」を構築していく必要があると考えます。まさに、「経済学」とは「人間学」であり、したがって、「経済学を考える」ことは、今回のシリーズ・チャペルのテーマである「人間を考える」とであるとしたいと思います。

なお、今回の講話に関して左記の文献を参考にしました。皆さんもぜひ、一読して下さい。

【参考文献】

サミュエル・ポウルズ著（植村、他訳）『モラル・エコノミー インセンティブが善き市民か』（N-T出版、2017年）
ジャン・ティロー著（村井訳）『良き社会のための経済学』（日本経済新聞社、2018年）
小島寛之著『宇沢弘文の数学』（青土社、2018年）